

新たな信仰を広めるための組織づくり

宣教師たちは信徒を獲得するため、まずその地の大名に教えを説いて改宗させたのち、彼らを介してその家臣と領民を集団で改宗させるという方法をとった。大名が改宗に応じない場合は、ヨーロッパから持ってきた品々を贈ることによって領内での宣教の許可を得た。

九州、山口、畿内（京に近い国々）地方で布教していた宣教師たちは、説教を行った村や町の有力者のなかから数名の信仰指導者を選んだ。そうすることにより、宣教師がいなくても自分たちの力で信仰を続けていくことが可能な組織がつくることができた。この地域組織は慈悲の組と呼ばれ、1587年に豊臣秀吉がキリスト教の神父の追放を発令したあとも存続した。有馬、大村、天草の地域には、信仰の維持強化のためにコンフラリア（信心会）と呼ばれる組織もつくられた。

このような積極的な活動の成果として、ヴァリニャーノは日本イエズス会をゴアの布教区から独立させて、「下（現在の有馬と長崎）」、「豊後（現在の別府と大分）」、「都（現在の京都）」の三教区に分かれた準管区とした。この制度によって、イエズス会は日本のキリスト教布教の進展だけでなく、日本の政治や社会についても詳しい報告書をまとめて毎年ローマのイエズス会本部に送ることができた。

（挿画：庄司好孝）